



# マスコミ青山

会報

特別版

Nov.2008 No.28(特別版)

## 総会ゲスト高橋克典氏特別インタビュー全文

今年マスコミ青山会総会で講演をされた高橋克典さん。十二月公開の映画「特命係長・只野仁 最後の劇場版」では主演を務められています。初等部から本学院に通い、歌手としてデビューされ、俳優としても成功を収めています。会報誌では載せきれなかったインタビューの全文を掲載致します。  
(聞き手…会報編集部鈴木章、金内佑加)

ラグビーがベース

**編集部(以後、編)** 学生時代はどんな生徒だったんでしょ?

**高橋氏(以後、高)** 僕は両親が音楽家で全くの文科系の血筋なんです。それで初等部の三年生からトランペット部隊に入って、トランペットをやっていました。他に学級委員長とか児童会の議長や部長もやりましたね。でもまったく運動神経のない両親から生まれて自分では運動をやりたかったです。初等部の時に周りの友達がコアラーズ(初等部のラグビー部のチーム名)に入っていたのも羨ましく思っていました。それが初等部五年生の時、登校途中でタクシーとの接触事故に遭ったんです。ちょうどその日が運動会で、事故のことを内緒で学校に行ったら、それまで足が遅かったのに急に一番になってしまった。どこかスイッチが入ったんでしょうね。それから運動神経が割と良くなって(笑)。そして中等部入って青学といえはラグビーかなと思っただけでラグビー部に入りました。当時はまだ根性ラグビーの時代だったんです。水飲むなとか合宿でも「気合だ」みたいなことですね。両足怪我して、靭帯が腫れて、まだ足が着けない状態なのに引き摺り起されて走れとか言われて(笑) そんな時代でした。

**編** たくましい肉体はその時に培ったものですか。  
**高** ええ、やっぱりベースになっているでしょうね。でも高校一年で辞めてしまったんです。ラグビーがわかる前に。今から思えば残念だったかなと思っます。肉体を本当に限界まで酷使して運動したというのは今のベースになつてますね。

**青学で得たものは情熱**

**編** ほかに印象に残っている思い出は?

**高** たくさんありますね。でも直接いまの人生に影響のあったことはそれほどないかも(笑)。ただ当時の初等部部長だった伊藤朗先生は非常に優れた牧師さんで、その情熱を僕らも受け継いでいる気がします。聖書は普通の学校でやる道徳の時間と同じで「なんだその綺麗ごと」みたいなものです。高校くらいになるとキリスト教の実際の現状とか歴史的なこともわかかってきて、気持はどんどん離れていってしまうんです。でも今になってみると、宗教がどういふものかわかってきますよ。心酔してるわけでもないですけども、ないよりあった方がいいですね。人の心の拠り所でもあり、物事の考え方の指針でもあり、人間は汚いものだからこそ綺麗ごとがあるということでしょう。

情熱を育ててくれるという意味では、青学は非常にいいところだったと思います。僕は下からだし、競争のない受験もないところで育ってきて、良い意味でも悪い意味でも競争知らずで来ました。だから世間に出てすぐの時苦しかったですね。



(大活躍中の高橋克典氏)

今でも何事もそこまでやらないと気が済まない。あの時、それだけ苦しい思いをして鍛えられたというのは良かったな、と思います。

**編** 当時ラグビー部は強かった?

**高** 僕らの二つ上の代が強かったです。花園に出た選手もいたし、全日本チームに入った人もいらっしやう。目黒高校のラグビー部の監督をされていた梅木監督の息子さんや早稲田大学のラグビー部の部長になった人とかがいたんですよ。

**編** ラグビーをお辞めになった後は?

**高** 遊んでました(笑)。ブラブラしたりとか、夜六本木に遊びに行ったり、そんなことばかりしてました。三回停学になりましたしね。

**編** それは書いていいんですか(笑)。

**高** 僕の高校時代、それがいいと…(笑)。

**編** そのまま大学に進学された?

**高** ええ。何の主旨もないまま。自分の道も決まらないうえ、みんなも行くしみたいな感じでした。

**編** 経営学部でしたよね?

**高** はい。何人か集められて「君たちみたいな生徒は本来、経営学部には必要ありません」とか言われちゃって(笑)。「真面目にやるんだしたら入れてあげます」と言われたので「やります」って言いましてね。

**編** キャンパスは渋谷ですよ?

**高** ところが僕らの一つ前の代から厚木になったんですよ。ピカピカの厚木キャンパス二期生です。

青学出身の人ってそういうところ多いんじゃないですか。

### サザンオールスターズとの出会い

**編** 歌手になろうと思いはじめたのはいつ頃？

**高** 両親が音楽家だったのもあるんですけど、一番初めに憧れたのはミュージシャンでした。トランペットを吹いていたのもそうなんです。中等部の文化祭で、青学講堂で歌ったんです。十三、四歳の時に二十人の会場で歌えるという事はなかなかないことですよ。そこでなんか夢見ちゃったんでしょう。僕が中学三年の時にサザンが学生バンドとして大学の前夜祭に来たんです。チケットをなんとか手に入れて観に行っただんですけど、サザンが良過ぎて、やっぱりいいなって思っていましたね。

### 卒業アルバムと叔父

**編** 俳優を目指したきっかけは？

**高** 俳優になりたいと思ったことはないんですけど、ただ小学校の卒業アルバムに「努力して立派な俳優になりたい」と書いてるんです。なんかえらいこと書いたやっとなつて(笑)。叔父(梅宮辰夫)が俳優で、当時叔父が倉本聡さんの「前略おふくろ様」という名作ドラマに出ていたんです。その収録現場を見せてもらったことがあって、魅力的な世界だなって思いました。スタジオで桃井かおりさんや、いろいろな人にサインをもらってましたね。その影響があつて、俳優っていいなつて。

その時知り合った方が去年「点と線」というビートたけしさんと共演させていただいた時の監督、石橋冠さんです。

### 深町先生の人柄に触れて

**編** 結婚式は青学の礼拝堂だったそうですが、特別な思い出があつたのですか？

**高** 自然と礼拝堂に落ち着いたんですね。普通の結婚式場でやるのは嫌だったんです。海外でやりたいなつて思っただんですけど、親戚や仕事の関係で無理で。

それなら、できるだけ素朴なところでやりたいと思っっていました。ある時、深町先生にお会いできる機会があつたんです。ビジネスマンではない、現役の牧師さんである深町先生のとて温かい人柄に打たれまして「ぜひ結婚式は青学で」と思っただけです。

本日は貸してないんですけどね。ちょっと無理言つてお願いしました。そして短大の教授をやつた母親や、関係各位に色々話をして実現したんです。オルガンをわざわざ直して使つたりもしましたね。今では青学会館での結婚式のセールスポイントの一つになっていて。こんなことになるなんて思いもしませんでした(笑)。

### 今の青学生

**編** 一昨年の相模原キャンパスでの講演会で今の青学生を見てどう感じましたか？

**高** 今の方が楽しそうでしたね。僕が内部進学者だからかもしれないんですけど「大学入ったぞー！さあ遊ぶぞー！」という気持ちがあまりしなかったんです。大学生がやる遊びを高校の時に全部やっちゃつてたから。

相模原キャンパスはいかにもキャンパスっぽい感じですよ。だから相模原に移つて良かったと思います。

あと、青山キャンパスの古い建物は無くさないで欲しいですね。あれはあれでいいですね。

### 毎シーン、アイデアを持って行った

**編** 爆発的な人気シリーズである「特命係長・只野仁」ですが、最初にお話があつた時どういう印象を受けましたか？

**高** 夜の十一時だからそこでものを、やりたかつたんです。原作があるんですけど、どの部分を持ってきたらいいかについていろいろ議論しました。最初に出来あがつた時は普通の探偵物で、二時間ドラマの一時間物みただけなんです。「これじゃつまらないよ」ってそれを崩すことばかり考えてました。どうやったら面白くできるか、アイデアを毎シーン、持つて行きました。

その結果「よし、面白い要素を全部取り込んでやるよ」ということになり、今のかたちになったんです。

**編** 設定が広告代理店の総務係長ですが。

**高** 原作がそうなんです。広告代理店である時代に急に出てきた仕事で、よくわからない、いかがわしさがあるでしょ(笑)。その中のうだつの上がない存在です。

### やりたいこと

**編** ドラマの中で一年三カ月の有給休暇をください、というシーンがありました。が、もし今、一年三カ月のお休みが取れるとしたら？

**高** やりたいことはいっぱいありますよ。海外に住んでみたいですね。パリに行きたいし、日本でも海外でもいいんですけど、田舎に住んでみたいですね。大学も行ってみたい。僕、英語の十二単位だけ残して大学を辞めてるんです。今、取り直せるらしいので、その単位を貰って卒業というのもいいし。自分でカリキュラムを組んで、同時にいろいろな勉強もしたい。

海外のオーディションも受けてみたい。法律も勉強したいし、権力の勉強もしてみたい。映画学校にも行ってみたいし、家族と田舎で大草原の小さな家にも住みたいし……。

**編** 今後どのような役に挑戦してみたいですか？

**高** 出会った作品に精一杯向き合つて、自分にできる可能性のあるところまで精一杯頑張りたい。やりたいことは本当にいっぱいあります。

只野仁という作品がこんなに長く続くと思っていなかったのですが、お茶の間に直接届き、日本中で観られるテレビの意味や意義は感じています。ただあまり長過ぎると役のイメージと、テレビの人という印象が強くなり過ぎてしまいます。役者としては、いろいろな作品、いろいろな役、日常、非日常、悪役もやってみたいし、短絡的なものから人間の奥深さを描くものまで挑戦していきたいですね。

やっぱり四十歳を越えて少しずつ、いろいろな役をやつていく必要がある気がします。